

## 『庭』 (にわ)

【初出】昭21・1「新小説」に発表され、のち、『冬の火花』(昭22・7、中央公論社)に、「津軽通信」と総題される五篇中の冒頭的一篇として収録 【全集、文庫】全集8、新潮文庫『津軽通信』、河出文庫『さよならを言うまえに』、ちくま文庫全集8 【梗概】罹災して津軽の生家(長兄宅)に辿り着いた私と家族は、程なく敗戦の玉音放送を聴く。兄は廃園と化した庭の草むしりを始め、私もそれを手伝う。《草ぼうぼうの廃園》もまた趣があると感じる私に、兄は歳をとるとそうはいかなくなる旨を言い、話は庭の流儀から《利休の事》へと移って行く。兄は太閤に向き合った利休を称揚するが、私はそこに男や大人のもつ変な世界を感じ、口は反発するものの、所詮兄にはかなわぬ身の上に《張り合ふなんて、恥づべき事》ができる筈もなく、する気もない。名士である兄には訪客が絶えない。明日も暮の名人呉清源が来る。私はふと、この人も《案外、草ぼうぼうの廃園も悪くないと感じる組》ではないかと思ってみたりする。 【作品評価】服部康喜に、要言(東郷克美編「太宰治全作品事典」・「別冊国文学・太宰治事典」平6・5)が見える。 【研究展望】「パンドラの匣」(昭20・10・21・1) 辺りから「トカントントン」(昭22・1) 辺りまでの約一年強に互る一連の表現

群を《津軽もの》と呼んでみよう。そしてそれらがまた、《戦時下》に「津軽」を提出した作者＝太宰が、敗戦の《国》となった《戦後日本》とともに自身の《故郷》である《津軽》の《家》の《中》を飯のSMICAとし、この世界へ遍く向けて発していた表現群であることを確認しておこう。つまりこの作品は、その津軽の《家》の中の《庭》を舞台とする、二重の意味での《津軽もの》、名実ともに「津軽通信」の巻頭に布置されるべき性質のものであった。巻頭にと敢えて言うのは、しかし、これが「津軽通信」の狙いの中心にあることを意味しない。そういう意味での狙いを言えば、同総題下の「親といふ二字」や「やんぬる哉」 辺りをまず引き寄せておくべきであり、皮肉にも、終戦と同時に帰郷を余儀なくされた太宰の、いわば作品「津軽」的な、義の証し、(タケに象徴させるもの)にも似た不易で妥協のない、クニ(戦後日本)とクニ(故郷津軽)の両刃の上に立つ、みごとに誠実な実践であった。《やんぬる哉》とは正にそういう心境を言っており、「庭」の《草ぼうぼうの世界》をよしと見る《私》の心のやむなき行方を暗示している。芭蕉の「わび・さび」には利休にはない「かるみ」の「まこと」があるぞ、と太宰は言いたげである。世相は一気に変じ、が、人の世は何一つ変わらない。(自給自足のアナキズムの桃源) (苦悩の年鑑) を恋うる——即ち、かの無頼派宣言の開始である。